

論文

＜貢献＞する＜人間＞という人間像

—藤沢周平の作品世界を顧みて—

幸 津 國 生

An image of human beings as ‘human beings’ making a ‘contribution’

—with regard to the world of Fujisawa Shuhei’s works—

Kozu, Kunio

1. 問題の所在—＜貢献＞する態度と＜人間＞であること

現代日本社会において、一人ひとりの人間には他の人間に対して或る態度を取ることが求められていると思われる。すなわち、＜貢献＞する態度である。では、何故この態度を取ることが求められているのか、その根拠が問われなければならない。さしあたり、当の態度を取ることの根拠への問いをめぐって、この態度の主体である人間について次のように言うことができよう。つまり、ここでの人間とは、あれこれの人間ではなく、例外なしにあらゆる人間であり、したがって＜人間＞一般である、というようにである。このように言うとするは、当の根拠への問いに一つの答えを与えていることになろう。というのは、この言い方に従うならば、＜貢献＞する態度とは一人ひとりの人間が＜人間＞であることを示す態度であるという根拠に基づいて、この態度を取ることが求められているとすることになるからである。しかし、この問いについては、様々な答えがありえよう。そのことを考慮しつつ、本稿なりの答えを見出すために、次の文脈において考察を進めたい。

まず、この問いが立てられることには、この態度をめぐる現代日本社会における状況がその背景となっているであろう。そこで、この背景に言及

する必要がある。というのは、この問いが立てられるということについて、この問いに答えるべき主体としてのわれわれにとって時代・社会の制約、つまり、われわれが現代日本社会において生きていることに伴う不可避的な制約を抜きにして問いに答えることはできないからである。

次に、しかしその際見落としてはならないことは、この問いにおいては同時にこの制約を度外視してもなお問われるべき事柄が問いとして立てられているということである。すなわち、そこには先に触れた答えも含まれるであろうが、＜人間＞一般についての立場もありうるのである。すなわち、そもそも＜人間＞というものはこの態度を取るようにできているのであって、そうである以上もともとこの態度を取るはずであるとする立場である。このことを原理的に徹底させるならば、そこには＜貢献＞の心、つまり「貢献心」が「本能」として＜人間＞には備わっているとする立場が成立することになるであろう。この立場は、人間が＜人間＞として生きるということについて一人ひとりの人間が他の人間に＜貢献＞する態度を取るという「本能」において実現されるとするのである。そこで、われわれはこの立場による根拠づけが妥当であるのかどうかについて吟味しなければならない。

さらに、われわれは、当の態度をめぐって先に触れた現代日本社会の状況および原理的な立場との関連において「むかし」の日本においてはどのようなであったのかという問いを立てるように促される。この問いに直接答えることは、筆者の能力を超えている。ここで筆者に可能なことは、ただ「むかし」の当の態度が「いま」現代日本社会においてはどのように捉えられているのかについて検討することにすぎない。その際、われわれが現代日本社会という時代・社会の制約の中に生きているということを意識しよう。その上で、＜貢献＞する態度が生ずる場面として、このような制約にもかかわらず、あるいはこのような制約の中に生きているからこそ、あえてこの制約とは別の制約のもとで設定された一つの状況を手がかりとしたい。そのような状況の設定のもとでは、原理的な立場を考慮しつつ、この立場が原理的であるならば、では「いま」当の態度がそのものとしてあるばかりではなく、「むかし」それはどのようなであったのかという問いを立てることになろう。

そのような状況とは、当の態度が生ずる場面を描くものとしての時代小説において設定された状況である。時代小説においては、「いま」を生きる人間（作者）は、その時代・社会の違いにもかかわらず、あえて「むかし」にその身を置いて、当の態度を描いているのであろう。そしてわれわれは、そこで描かれたものによって先のような原理的な立場を取るのかどうかはともかく、「いま」もなお変わることなく存続している（と作者が捉えている）ものに思いを致し、その日本の文化的伝統に根ざすものに基づいて「これから」への示唆を得ることができるのではないだろうか。本稿では、とりわけこの態度にあたるものを「にんげん」の態度として描く藤沢周平の作品世界における描写を取り上げたい。

そこで以上の文脈に含まれる次の六点について

論究しよう。すなわち、第一に本稿の問いが立てられる背景として「いま」現代日本社会の状況に生きるわれわれにはこの態度を取ることが求められていること（2）、第二に当の問いへの一つの原理的な答え（3）、第三に何故この態度に関わるものを描く時代小説とりわけ藤沢周平の作品世界における人間像を手がかりとするのか（4）、第四に藤沢の作品世界における「にんげん」つまり＜人間＞の捉え方（5）、第五に同作品世界における＜貢献＞する態度の描写（6）、第六にまとめとしてこの人間像はわれわれに何を示唆するのか（7）、という点である。

2. 本稿の問いが立てられる背景

まず、本稿の問いが立てられる背景としてどのような事情があるのか、について検討しよう。この問いが立てられる背景を明らかにするためには、＜貢献＞する態度をめぐる時代・社会の制約、つまり現代日本社会の状況およびその中で「いま」とりわけこの問いが立てられる状況に触れる必要がある。

一方では「いま」現代日本社会においては、この態度に関わる多様な活動が活発に行なわれている。とりわけ特別にそのようなには呼ばれていないとしても、あるいはむしろ当然のこととして、東日本大震災からの復興に向けて様々な活動（ボランティア個人・団体や自治体による支援活動など）が展開されている。そしてまたそれ以前から社会的な広がりにおいては、「社会貢献」・「地域貢献」という用語で表現される活動（企業やボランティア個人・団体が社会一般に向けて行なう活動など。多くの大学において盛んに開かれている「生涯学習公開講座」もその例として挙げられよう）が広い範囲で行なわれている。さらに後者の国際版として国際的な広がりでの「国際貢献」（いわゆる発展途上国の民衆への民衆レベルで

のNPOによる支援活動など。国際レベルの活動については国家間の関係などの考察が別に必要であると思われるが、ここでは〈人間〉一般の態度の問題として理解しよう)も同様である。このように、この態度に関わる活動は現代日本社会においてごく一般的に見られるものであり、そしてこの活動を表現する当の用語もごく一般的なものとして用いられていると言えよう^(註1)。

このような状況から見ると、「社会貢献」などの用語で表現される活動に関する限り、一定程度実践されつつあるのであろう。そこでは、現代日本社会においてこの活動に携わる人間がそれなりの仕方でも〈人間〉として生きることについて一つの具体的な形を示していることが見出されよう。

ただし、ここで留意されるべきことがある。すなわち、この用語には「貢献」という語の通常の用法を超えるものが含まれているように思われることである。「貢献」という語は通常、一定の活動の中で積極的なものを評価する場合に次のような使い方でも用いられる。例えば或る野球選手が試合の中で攻撃・守備のいずれかにあるいは双方に活躍し、そのことによってチームの勝利に「貢献した」、と言われるような使い方である。その場合には、その活動は確かに賞賛に値するものではあるけれども、しかしもともと選手として本来期待されている役割を果たしたという意味でこのような使い方(それはしばしば選手としての「仕事」と表現されもする)が用いられていると思われる^(註2)。これに対して先の用語は、このような役割を超える活動に対して用いられるのではないだろうか。つまり、それはもともとの役割を果たした活動であるという意味で評価される活動であることは当然であるが、さらに「社会」などの語が加えられることによって特別に賞賛に値すると評価される活動に向けられているのであろう。この場合、

「社会貢献」は各人それぞれの本来の活動とは区別されて、この活動の範囲を越えて行なう活動と見なされているのであろう。

これに対して注目されるべきことは、「貢献」という語がすでに広い意味では「社会」を対象として含む語として用いられているということである。そのことは、辞典類での語義・用法に示されている。例えば「人類や社会のために役に立つことをする」(漢和辞典990)、「そのために力を尽くして寄与する。『社会への——度』」(漢語辞典960)、「力を尽すこと。あずかって力あること。寄与。『社会の進歩に——する』」(広辞苑890)。したがって「社会貢献」という場合、それらの語義・用法だけでは捉えられない対象として「社会」が取り上げられていると考えられる。

ここには、「貢献」という語が用いられる際に含まれる意味の広がりも示されているのであろう。すなわち、まずこの語は一般にその対象にとって肯定的に評価される活動に対して用いられており、さらにそれは、とりわけ特別に賞賛に値する活動として肯定的に評価される活動に用いられているという意味の広がりである。それ故、われわれはその意味の広がりを念頭に置きつつ、〈貢献〉する態度について考察する必要がある。

「社会貢献」という用語で表現される活動においては、その主体は言うまでもなく社会における人間である。その際この主体の活動について当の用語が用いられるということには、一定の人間理解が前提されていると思われる。すなわち、一般に一人ひとりの人間は他の人間のために〈貢献〉する態度を取る(べきである)、という人間理解である。ここで問われるのは、この前提自体について、つまり、この人間理解がそのように前提されることはどのようなことなのかについてである。そこでわれわれは、そもそも人間がそのような態度を取るという点について、どのような根拠

に基づいてそのように言うことができるのかを論究しなければならないであろう。

だが他方では、とりわけ＜貢献＞する態度をめぐる問いが問いとして立てられる背景には、次の状況が存在するであろう。すなわち、この態度についての理想と現実との間に大きな落差があるという状況である。

この態度は、もしそれに基づいて一人ひとりの人間の活動が実践されるならば、その活動は一般に＜人間＞の取るべき態度として理想的なものとされると思われる。このことを否定する議論は、おそらく誰からも出されないであろう。

しかし、果たして現実に一人ひとりの人間がこの態度を取っているのかとなると、かなり疑わしい。例えば、東日本大震災における原発事故被災地での空き巣被害^(註3)、またマス・メディアの報道の中で「無縁社会」と言われる現代日本社会^(註4)における児童虐待や高齢者の孤独死などが日常的に起こっている。このような事態は、その疑いを確証しているようにも思われる。それは、前述のように「社会貢献」というような用語が一般的に用いられていること、したがってこの用語によって表現される活動が盛んに行なわれていることとは相反する事態である。つまり、このような事態においては、一人ひとりの人間が他の人間ために＜貢献＞するという態度が欠けていると言わざるを得ない。それ故にこそ、この態度をめぐって問いが立てられるわけである。このような事態は、われわれがおそらく理想とするであろうことをまったく否定するものであろう。それは、＜人間＞というものについてわれわれをほとんど絶望させるほどのものである。

だが、現実がそのようなになっているにもかかわらず、あるいはそのようなになっているからこそ、ここで想起起こしたいことがある。それは、人間が人類としてのその歴史を通じて当の態度を取る

ことを求め続けてきたということ、そのこと自体である。

ここで、＜人間＞というものはこの態度を取るものであるということにしよう。あるいは、次のようにも言えよう。すなわち、そもそも＜人間＞というものはこの態度を取るようになってきているのであって、そうである以上もともとこの態度を取るべきであるというよりも、そのようにするはずである、というようにである。このことを原理的に徹底させるならば、そこには＜貢献＞の心、つまり「貢献心」が「本能」として＜人間＞には備わっているとする立場が成立することになるであろう。

3. 本稿の問いへの一つの原理的な答え

3.1 「ホモ・コントリビューエンス」としての人間像

近年このような立場として、人間の「貢献する気持ち」のうちに「ホモ・コントリビューエンス」としての人間像を見る立場（滝 2001 参照。後述参照）が提唱されている。この立場は、一つの希望をわれわれに抱かせる。すなわち、＜人間＞というものには本来この人間像に近い在り方をする可能性があるかもしれないという希望である。

この立場が主張されることは、われわれを取り巻く現代日本社会における状況を見るならば、非常に意味深いものであろう。そのように言うのは、次の二つの事情からである。

まず第一に、前述したようにとりわけ人間相互の関係をめぐって、「いま」われわれはこのような人間像とは相反する先のような報道が日常的になされているような状況に置かれているという事情である。そしてこの立場が主張されることによって、このような状況があるにもかかわらず、人間の生き方というものは少なくともそのような状況に生きることに尽きるような生き方には限られな

いということがあらためて強調されるわけである。とりわけ一人ひとりの人間にとって、そのような生き方が他の人間ではないその人間らしくあるいは<個人>として生きることになっているのが問われよう。(ここでの<個人>とは他の人から見れば<その人らしさ>、本人にとっては<自分らしさ>によって捉えられるであろう。その際、本書では<自分>をその当の人間にとっての主観的な側面をなすものとして捉え、客観的な事柄としての<自己>と区別する。両者は重なっているが、<個人>の生き方にとってとりわけ<自分らしさ>が重要となろう。というのは、<個人>にとって<自己>の生き方が外側から規定されるのではなくて、あくまで内面において、つまり<自分>から生じたものとしての<自分らしさ>において受け止めることが求められると思われるからである。)

さらに第二に、この立場は<人間>とは何かという根源的な問いをめぐって新しい人間理解へとわれわれを促すという事情である。すなわち、これまで何らかの人間の態度について評価がなされる際には、<貢献>する態度は肯定的に評価される態度として取り上げられることが多かったという事情である。この事情のもとでは、この態度はとりわけ道徳的視点から肯定的に評価されると考えられる。この点は、前述のように、「貢献」という語の通常用法においても、さらにこの用法を超える「社会貢献」という用語の用法においても見られるであろう。このような理解のもとでは、当の態度が一人ひとりの人間に求められているのだが、それがどのような根拠に基づいているのかは必ずしも明らかではない。この根拠が明らかにされるならば、「貢献」する一人ひとりの人間はいままでよりも深く確信して、この態度に基づく活動をさらに進めることができるであろう。仮にそれが道徳的に評価されるという点では従来の捉

え方と変わらないとしても、とにかく明確に根拠づけられることによって、一人ひとりの人間はそのような活動を進めることに確信を持つことができるようになるであろう。

しかし、このことに確かな答えを与えることはなるほど望ましいことであるとしても、非常に難しいことである。というのは、或る事柄について道徳的評価を与えることについて何をもってその根拠と見ることができるのかという点をめぐっては、様々の思想的立場からの答えがありうるだろうからである。

これに対して、先に触れたように、近年提唱されている立場としてこの態度を「本能」として捉え、したがって特別に道徳的な評価の対象にはしないという立場がある。確かにこの立場も一つの思想的立場ではある。しかし、この立場には他のもろもろの立場とは異なるところがある。というのは、この立場は<貢献>する態度をめぐって、次のような従来の立場とは異なっているからである。すなわち、この態度は一人ひとりの人間が他の人間に対して取るべき態度であるとして道徳的に評価し、その道徳的評価の根拠づけをいわば人間というものの外側から行なってきた立場である。これに対してこの立場は、このように外側から行なわれる道徳的評価の根拠づけをいわば人間というものの内面から覆すものである。すなわち、それはこの根拠を当の態度を人間というものの「本能」に基づくとすることによって、この態度を道徳的に評価すること自体を超えるのである。この立場に基づくならば、この態度は人間がただ道徳的に取るべき態度ではなくて、むしろその人間が生きようとする際の人間としての一つの「本能」であるという。すなわち、この態度は一つの「本能」として人間に備わったもの、つまりもともといわば<自然>によって人間に与えられたものとして捉えられることになる。そのことによ

て、これまでとは異なった立場から人間を捉えることが可能になるであろう。

では、そもそも人間にこのような「本能」があるのかどうかということをめぐることは、いろいろな議論がありえよう。しかし、そのように「本能」とは規定しないまでも、「貢献心」による態度に近い仕方でも「貢献」という態度が取られるということ、少なくともそのようなことがあるということそのこと自体については、「むかし」から気づかれてきたことであると思われる。

3. 2 孟子における「惻隱の心」

例えば、人間にはそのようなことがあると指摘した思想家として孟子を挙げることができよう。孟子は、そもそも「人」つまり人間というものもともとそのような態度を取るものであるとして、そこに「人」が「人」である所以を見出したのである。

孟子は、これを「惻隱の心」として取り上げた。彼は、この心を井戸に落ちそうになった幼児を助けようとする人間の態度のうちに見出す。すなわち、

人皆人に忍びざるの心有りて謂う所以の者は、今、人乍(猝)に孺子の將に井に入(墜)ちんとするを見れば、皆怵傷惻隱の心有り、交を孺子の父母に内(結)ばんとする所以にも非ず、譽を郷党朋友に要(求)むる所以にも非ず、其の聲(名)を惡みて然るにも非ざるなり。是れに由りて之を觀れば、惻隱の心無きは、人に非ざるなり。

現代日本語訳「誰にでもこのあわれみの心はあるものだとどうして分るのかといえ、その理由はこうだ。たとえば、ヨチヨチ歩く幼な子が今にも井戸に落ちこみそうなのを見かければ、誰しも思わず知らずハッとてかけつけて助けようとする。これは可愛想だ、助けてやろうとの[との一念から]とっさにすることで、もちろんこれ(助

けたこと)を緣故にその子の親と近づきになろうとか、村人や友達からほめてもらおうとかのためではなく、また、見殺しにしたら非難されるからと恐れてのためでもない。してみれば、あわれみの心がないものは、人間ではない。」(『孟子』卷第三 公孫丑章句上、(上) 139-140)

見られるように、孟子は一人ひとりの人間が他の人間に対して取るこのような態度のうちに「人」の本質を見出した。すなわち、彼は何らかの外的な理由によってではなくて、当の態度を一人ひとりの人間が他の人間ではなくまさにその人間として生きる態度として、つまりその人間の内面から発する態度として捉えたのであろう。われわれが孟子のこの思想を受け容れるならば、このような態度を「本能」と見ることもできるであろう。

この態度を「本能」とするとき、人間がこの「本能」に基づいてこそ＜人間＞であるとされる以上、このような態度を取るということは、一人ひとりの人間が＜人間＞であることの証であるということになろう。ここに、人間にとってこの態度についてどのように位置づけるのかという問いへの極限的な答えがあろう。というのは、人間とはあるがままに、あるいはもともとこの態度を取るものであるとするならば、そもそもこの態度を取るべきであるとする根拠は一人ひとりの人間にとってその＜個人＞の外側からではなく、内面において与えられていることになるからである。したがって、この態度を取ることに、人間はもともと「本能」故にそのような態度を取るのだから、これを特別に人間が取るべき態度として道徳的に肯定的な評価を与える必要がないことになるであろう。

しかし、もしこのように答えなくても、少なくとも人間がこのような態度を取ることがあるということについて、「むかし」から人間が気づいていたということは、誰にとってもほぼ共通に了解

される点として認められるであろう。

ただし、そこに一つの問いが生ずる。それは、人間はそのような態度を取ることがあるということを確認すると、しかし、人間が往々にしてそのようにはしない態度を取っているのは何故なのかという問いである。一方でもしそのような態度を取ることが人間の「本能」であるならば、人間がそのような態度を取っても不思議ではない、あるいはそれはごく当たり前であるはずである。他方でそうであるにもかかわらず、或る人間がそのようにはしない態度を取るのもまた、われわれにとってあまりにもありふれたことであり、ごく普通のことである。これら二つのことの間一人ひとりの人間が＜個人＞であることの現われがあると言えよう。つまり、その人間が外側からではなく（仮にそのように促されるにせよ）、自己の内面において当の態度を取るのかどうかが決めるのであろう。本稿におけるような問いが立てられるのは、＜貢献＞する態度が現実には欠けているという事態がわれわれにとって現前しているからである。この事態のように当の態度を取らない場合、このことが何故起こるのかが、「本能」説に対してあらためて問題として提起されるであろう。

そこで、この態度を「本能」と捉えるのかどうかはともかく、そのような態度を取ることが時代の違いを超えて、一般的に言えば歴史を超えて、＜人間＞そのものにとって不可欠の部分としてある（そのようなことがありうる、あるいは、あるべきである、とすることも含めて）のかどうか、という問いを立てよう。そしてそのような問いへの答えを求めることで、＜貢献＞するという態度についての問いへの答えに少しでも近づきたい。

4. 何故、時代小説とりわけ藤沢周平の作品世界を手がかりとするのか

本稿ではこの答えに近づくために、時代小説、その中でとりわけ藤沢周平の作品世界における人間の描写を手がかりとしたい。では、何故そうするのか。このことが問われよう。

まず、そもそも何故時代小説を取り上げるのかを明らかにしなければならないであろう。言うまでもないことではあるが、時代小説もその一つである人間の態度についての表現形態は、思想的なそれを含めて広い範囲に及ぶであろう。しかし、人間の態度についての描写、つまり個々の立ち居振る舞いの描写は、文字による言語表現という範囲に限定するならば、最も活き活きとした仕方では時代小説を含めて文学作品一般において行われると言っているのではないだろうか。というのも、人間の態度は文学作品一般において登場人物の個々の立ち居振る舞いが描写されるという形で具体的に示されるだろうからである。

そしてさらに、その中でも本稿としてこのような問いに対する答えの一つの仕方として時代小説における人間の描写を取り上げる理由は、次の事情のうちにある。すなわち、時代小説という形で「いま」現代日本社会において作者たちが感じ取っているものは時代の違いを超えて存在するもの、より一般的には歴史を超えるもの、つまり「むかし」から＜人間＞において普遍的に存在するものとして認識されているという事情である^(註5)。そして、この普遍的なものをあえて時代小説という形で表現することによって、「むかし」存在したものが変化し続ける「いま」においても存在しており、さらに「これから」もなお変わることなく存在し続けるであろうということを示そうとしているという事情である。

しかし、では何故作者たちは時代小説という形でこの普遍的なものを示そうとするのか、が問わ

れよう。この問いへの答えとして考えられるのは、次のことである。すなわち、作者たちの想定がそのようなものであり、そしてそれが正しいとするならば、この普遍的なものは「いま」もそのようにある（あるべき、あるいはあるはずの）当然のものとして存在するであろう。そのとき、「いま」を対象にすることによって表現されにくいものが、「いま」から一步離れた「むかし」を設定することによって表現されるのかもしれない。つまり、時代小説であるが故に、かえって変わることのない人間の姿が（現代小説よりも）純粋に描かれるのではないだろうか。このように見るならば、時代小説とは「むかし」の人間を描くという仕方、一般に歴史を超えて「これから」もなお変わることがないであろう人間の姿を「いま」の視点から描いた小説であると思われるのである。

「いま」現代日本社会という時代・社会の制約のうちに生きるわれわれにとって、「むかし」からの文化的伝統の中では人間の態度がどのようなであったのかということは、ごく当たり前の関心の対象であろう。時代小説の作者たちは、この関心を時代小説という形で表現しているのであろう。もちろん、それは作者たちによる想像の産物にすぎないと言いきることができないわけではない。しかし、われわれがこの作者たちによる想像の産物にすぎないとされるかもしれないものを手がかりに、日本の文化的伝統に連なろうとすることもまた理由のないことではない。というのは、現代日本社会に生きるわれわれ一人ひとりの人間が、すでにその人間のそれなりの仕方、日本の文化的伝統のうちに生きているからである。つまり、それが想像の中でのことにすぎないにせよ、ここで大事なことは、われわれが「いま」を生きつつも、つねに同時に「むかし」を生きているということである。そのとき、われわれは人間が＜人間＞として生きることをめぐって、とりわけ＜貢献＞す

る＜人間＞という人間像において、人間像一般への日本の文化的伝統なりの役割を何らかの仕方、自己の人生のうちに見出しているのではないだろうか。このように、時代小説という形を取った日本の文化的伝統への関心からわれわれが「これから」生きていくことにとっての示唆を受け取ることができるかもしれない。

では、時代小説という形を取るによって、「いま」もなお通じるものがどのように表現されているのか、が問われよう。この点については、実際に時代小説の作品に即して吟味しなければならないであろう。

ここでの考察の範囲を、藤沢周平の作品世界がそこに示されるその時代小説に限ることにしよう。そこで問われるべきことは、何故対象が藤沢周平の時代小説であるのか、ということである。

時代小説においては、一般に一定の時代における人間の立ち居振る舞いが描写される。では、そのような時代小説の諸作品の中で、藤沢の作品世界の特徴はどこにあるのだろうか。それは、当の立ち居振る舞いがどのような場面で描かれるものであるかによるであろう。多くの作者たちの歴史小説を含む広い意味での時代小説には、言うまでもなく歴大な蓄積がある。藤沢個人による歴史小説を含めた時代小説だけでも、かなり多数の作品群がある。その中で藤沢の作品世界の特徴は、次のところにある。すなわち、登場人物の立ち居振る舞いが、歴史の変化というような大きな場面ではなく、日常の人間相互の関係における小さな出来事のうちに現われるというところにある。もちろん、そこには物語の展開する時代が主として江戸時代であるという限定がある。しかし、焦点は日常の出来事の中に現われる人間の立ち居振る舞いに当てられている^(註6)。

それは、いくつかのレヴェルで考えることができるであろう。その多様な立ち居振る舞いを表現

するために適切なものとして、長篇小説よりも主として短篇小説群を挙げたい。というのは、長篇小説は作品としての大きな流れの中で一人ひとりの人間について詳しく描写することにも適しているであろうが、そこでの登場人物は物語の設定によるけれどもその数の制約もあり、したがって人間像の形を示す個々の登場人物の多様な態度を描く上で限られる場合があるからである。つまり、人間の態度の表現については、多様性を犠牲にせざるを得ない場合があると思われるのである。もちろん作品によっては、多様な人物の多様な在り方を十分に描くことは多いにありうることであるが。これに対して短篇小説は、長篇小説には不可欠の作品としての大きな流れを度外視することができ、ほとんど断片的にであっても個々の人物の在り方に焦点を当てることができよう。したがって、個々の人物の多様な立ち居振る舞いを描くこともより容易になるのではないと思われる。

ただし、本稿で取り上げる人間の態度は、その多様性にもかかわらず一定の共通性を持っている。それを藤沢の作品世界全体の中でもろもろの作品に共通する部分として取り上げることになるのは、その作品世界を＜貢献＞する態度という点に限定して取り上げていることによるのかもしれない（この態度に限定して取り上げるのは藤沢周平の作品世界研究においておそらく本稿が初めてであると言えよう）。これに対して、もちろん他の視点から取り上げることも可能である^(註7)。藤沢もまさに多様な対象を描いている。しかし、そのような事情があるにもかかわらず、＜貢献＞する態度という点に絞ることには、一定の根拠がある。その根拠は、そもそも藤沢が何を描こうとしたのかを明らかにすることによって示されるであろう。以下取り上げることができるのは、その多数の作品群における作品世界のごく一部でしかない。しかしながら、それでもなお藤沢がその作品

世界で描こうとした事柄の基本となる点は表わされているであろう。

一般に人間を全体として描こうとするとき、どこに焦点を当てるのかについては『貢献する気持ち』の著者による個人の人生の「人生のモード」の把握とその中での「貢献心」の位置づけが参考になる。著者によれば、「人生のモード」は一般に「遊び」・「学習」・「仕事」・「暮らし」の四つの「モード」から形づくられているのであるが、さらに第五のものとして「貢献」を挙げることができるといふ（滝 2001: 75-78参照）。そこで浮き彫りにされる「新しい人間の全体像」が「ホモ・コントリビューエンス」であり、「貢献仲間」を意味するものであるとされる（同77参照）。

そこで問われるのは、では各人はどの「モード」を選択するのかということである。各人は、自由にその選択をすることができると言われる（同80参照）。しかし、このことを時代小説に適用して見ると、そこでは一定の限定がなされるであろう。というのは、時代小説に期待されているのは「人情」を描くということだからである（「人情」について後述の藤沢の言葉を参照）。

「人情」とは、人間たちが相互につくる彼らの関係の在り方において現われるものであろう。そのような「人情」に関わるものとして、＜貢献＞する態度はいわばもっとも集中度の高いものであると思われる。というのは、人間のもろもろの態度のうちで、＜貢献＞する態度はおそらく身分の違いに関わりなく、人間であれば誰にとっても関心事となりうるであろうからである。

他の「モード」の場合には、事情が異なるかもしれない。例えば「学習」について言えば、それを追求するには歴史の制約である身分によって許されるというような特定の条件が必要になるからである。もちろん、「学習」する過程を当の時代小説の主題として描くことはありうることであ

る。というのは、歴史の制約を超えて「学習」することへの潜在的な可能性は、誰にも与えられているはずだからである。

しかし、何が時代小説の主題とされるかについて言えば、その主題とは何よりも人間の相互の関係に生じることにその焦点が置かれるであろう。というのも、時代の違いを超えて変わらないものを描こうとするとき、他の「モード」は背景に退くだろうからである。つまり、その時代・社会の描写として誰にとっても共通であったであろうことにリアリティーが最も感じられるというわけである。少なくとも藤沢の作品世界に限れば、人間の態度を人間たちが相互につくる彼らの関係のうちで描くことに主な関心があると言えよう。

5. 藤沢周平の作品世界における「にんげん」の捉え方

本稿で取り上げるのは、藤沢周平の作品世界における＜貢献＞する態度（あるいはそれに類するもの）である。この態度をめぐって藤沢の作品世界におけるそれを取り上げる理由は、次の事情による。すなわち、その作品世界においては「むかし」の人間の立ち居振る舞いが描かれているのだが、当の態度がこの立ち居振る舞いの中でも「人情」の在り方を端的に示すものとして描かれているという事情である。

この事情の根底には、藤沢の作品世界における人間理解がある。藤沢自身が、その作品世界においては＜人間＞とはどのようなものかという問いに一定の答えを出すことに、時代小説というものの意義を見出している（後述参照）。

「にんげん」

藤沢の作品世界における人間像一般を端的に示すものとして、「にんげん」という規定が登場する。それは、或る人間が見知らぬ他の人間に対し

てどのような態度を取るのかが描かれる場合においてである。そこには、（先に見た孟子における「人」に対応するような）＜人間＞というものについての藤沢の理解が示されている。

例えば、短篇「うしろ姿」（藤沢 1985: 43-78）の場合を見よう。亭主六助が酔っ払ってひと晩泊めてやると連れてきたどこの誰とも分からないような乞食ばあさんに六助の連れ合いのおはまは、このばあさんを暗い闇の中にほうり出すわけにはいかないと声をかける。彼女は、その「異臭」を感覚的には受け容れられないけれども、そのところを我慢して「にんげん」としての態度を取るのである。藤沢の筆は、ばあさんに対するこの態度に現われるおはまの心の動き、そして身体の動きを描く。

ばあさんは、下からすくい上げるような眼で、じっとおはまを見た。その眼に、みるみる涙が盛りあがった。だがばあさんは泣かなかった。黙って立ち上がった。立ち上がって、夜の中に出て行くようにしていた。ひとつかみほどの小さい背を、おはまは見つめた。

「ちょっと待って、おばあさん」

おはまは不意に立って行くと、土間に降りかけているばあさんをつかまえて、上にあげた。とたんに異臭が鼻を襲ってきた。鼻をつまみながら、おはまは言った。

「ひと晩だけだよ。わかったね。ひと晩だけ泊って行きなさいよ」

泊めたくて泊めるわけではなかった。ただこの年寄を、寒くて暗い闇の中にほうり出すことは、にんげんとして出来ないとおはまは思っただけである。（藤沢 1985: 50）

ここに描かれる態度は、なるほど「異臭」を受け容れられないという自己の感覚そのままの態度、あるいは何らかの反省以前の態度であるとは言えない。つまり、まず「異臭」を自己の感覚と

してはとても受け容れられない。しかし、にもかかわらず、その感覚をそのまま表現するのでもない。つまり、自己の感覚そのままの受け容れない態度に「にんげん」としての反省を加えるのである。この反省は、道徳的な反省として<人間>に必要なものであろうが、ここで大事なことは、この反省をおはまがそれなりに自己の内面で行っているということである。つまり、彼女は自己の感覚に対してこの反省を加えるけれども、この反省もまた彼女自身の内面において生じているものである。その限り、彼女の外側から要求されるだけのものではない。

この点は、六助の場合はおはまの場合とはまったく異なる。彼は、無類のお人よしで、感覚的に違和感を覚えもしなかったようである。つまり、彼はあるがままであり、いわば「本能」的に他の人間に<貢献>する態度を取っているとも言えよう。しかし、この態度が現実に取りられるためには六助のような人間の在り方をあらゆる人間に期待することは難しいことであろう。実際、おはまは六助のような態度を取ることはない。むしろ、おはまの態度は誰にでもありそうな態度である。ただし、ここでのおはまの態度はその反省をどこまでも追求するわけではなく、自己の感覚に一定程度は正直でもある。つまり、この感覚に正直に「異臭」を受け容れないことをそれなりに貫くのである。「ひと晩だけ」は受け容れるというように、ほんの少し譲るわけである。

彼女は、自己の感覚に正直でありつつ、しかもこの感覚についてほんの少し反省し、両者の折り合いを自己自身の内面においてつけているのである。この態度は、そのようにして自己と他者との関係を両者に折り合いをつける仕方で作る態度であろう。一方で他者に対する自己の在り方を端的に自己の感覚のままに決定することもないし、他方で他者をそのまま受け容れるわけでもない。

このことによって、自己が「にんげん」であることと自己が自己であることを合致させている。「にんげん」という規定がこのしなやかな態度を取る主体について柔らかな仕方に取り上げられるわけである。「にんげん」であることは自己への或る程度の反省を踏まえつつも自己にどこまでも添っている。つまり、このことは自己の外側にあるのではなくて、自己の内面にある。したがってこの態度は、道徳的にそのようにあるべきであるとして自己の外側から評価されるかどうかとは別に、自己の内面から生まれてくる。それは、そのまま彼女の<個人>としての表現となっているのである。そのとき、彼女の態度は亭主六助のそれのような「本能」とは異なるかもしれない。しかし、それは彼女の内面から生ずるものとしてこれも「本能」であり、あるいはたとえそこまで言えないとしてもきわめて「本能」に近いものであると言えよう。

この短篇が対象とする時代の人間が実際にこの規定をそのように用いたものかどうかについて論ずることは、筆者の能力を超えている。しかしながら、ここには登場人物の心の動きが作者藤沢によって描かれている。すなわち、心の動きによる微妙なバランスの取り方が柔らかな仕方ですな「にんげん」という規定のうちに示されている。そこには、藤沢なりの仕方ですな捉えられた日本の文化的伝統に根ざす人間理解が示されていると言えよう。

「人情」

ここに示される藤沢の人間理解は、藤沢が時代小説は「人情」を対象とすると言うときの理解であろう。藤沢は、人間のうちに「不変なもの」があると云い、それを時代小説では「人情」と呼ぶと言う。

時代や状況を超えて、人間が人間であるかぎり不変なものが存在する。この不変なものを、時代

小説で慣用的にいう人情という言葉で呼んでもいい。「時代小説の可能性」、藤沢 1996: 180)

ここでは「人情」というものが「時代や状況を超えて」いるもの、つまり歴史を超えるものとして捉えられている。藤沢の時代小説は、この「人情」という「不変なもの」についてこれを歴史に照らして描き出し、＜人間＞とは何かという問いに対して出した一つの答えであることになろう。ただし、ここで歴史を超えるものと言うと、何か抽象的な観念であるかのように捉えられるかもしれない。しかし、そうではない。「人情」とは、そのようなものではなくて、登場人物相互の具体的な関係において働くものである。この点について藤沢は言う。すなわち、

一見すると時代の流れの中で、人間もどんどん変わるかにみえる。たしかに時代、人間の考え方、生き方に変化を強いる。たとえば企業と社員、嫁と姑、親と子といった関係も、昔のままではあり得ない。

だが人間の内部、本音ということになると、むしろ何も変わっていないというのが真相だろう。どんな時代にも、親は子を気づかわざるを得ないし、男女は相ひかれる。景気がいい隣人に対する嫉妬は昔もいまもあるし、無理解な上役に対する憎しみは、江戸城中でもあったことである。

小説を書くということはこういう人間の根底にあるものに問いかけ、人間とはこういうものか、と仮に答を出す作業であろう。時代小説で、今日的情況をすべて掬い上げることは無理だが、そういう小説本来のはたらきという点では、現代小説を書く場合と少しも変るところがない、と私は考えている。(同、藤沢 1996: 182)

こうして、人間相互の具体的な関係において「人情」が働くとき、その「人情」はいわば人間が＜人間＞であることの証として一人ひとりの人間が取るその人間なりの態度のうちに現われてい

るのである。

「現代小説」との対比という点については、いろいろ議論がありえよう。その点についてはともかく、時代・社会の違いを超えて共通の基盤になっているものへの注目が藤沢の描く人間像を生み出したと言えよう^(註8)。

本稿の主題に関連してここで注目に値するのは、この「不変なもの」としての「人情」の描写が藤沢の作品世界においてはとりわけ＜貢献＞に関わるものとして登場するということである。この点について次に検討しよう。

6. 藤沢周平の作品世界における＜貢献＞する態度の描写

藤沢周平の作品において、筆者が触れた限りでは「貢献心」という表現そのものは用いられてはいない。しかし、作品の登場人物として一人ひとりの人間が物語におけるその生き方の上で周囲の人間に＜貢献＞するということ、そしてそのことに関わる自己自身の生き方について何らかの思いを抱くということ、これらのことは大いにありうることである。もちろん、そのように言いうるのかどうかは、論証されなければならないことである。ここでは結論を先取りすることになるが、そのような広い意味ではその作品の中でこの概念にあたるものが登場する。それは、必ずしも概念化された形を取ってはいないけれども、登場人物の態度の描写に現われている。藤沢作品の場合、それはたまたまそこに現われたというものではない。それは、むしろ不可欠の要素である。

藤沢の作品は、登場人物としての人間の立ち居振る舞いについて描く。その立ち居振る舞いは、多様な姿で描かれる。その中で、或る人間が他の人間に対してどのような立ち居振る舞いによってその生き方に影響を与えるのか、またそのことに関わる自己自身がどのような思いを抱くのか、は

当然描かれるべき事柄であろう。その際注目されるべきことは、人間の立ち居振る舞いそのものは人間の思いというものに伴うにせよ、その立ち居振る舞いが何らかの反省以前のものによって惹き起こされるということである。

まずさしあたり、それは他の人間に対する一人ひとりの人間の態度として表わされる。これは日常の中で抱かれるものであろうが、それが最も鋭く表出されるのは、何らかの仕方で「生命」が問われる場面であろう。その場面とは、他の人間のために或る人間が自己の生命を投げ出すという場面である。そのような事情になるというのは、通常であれば考えられないことである。その場面では、或る人間がそのような状況に至って、通常の自己の在り方を超える在り方をするのである。そのとき、その人間は自己の生命を投げ出したりするのである。例えばそれは、反社会的な事柄に及ぶことを自己の仕事とする人間（藤沢作品では盗人など）がその仕事に反して、あるいはそれをやめて、あるいはまさにそのために他の人間に尽くすところに示されている。そのとき、何らかの反省、とりわけ自己の利害得失についての反省以前に他の人間のために動いてしまうという態度が取られるのである。しかし、それだけには止まらない。この態度自体に添う形で反省が行われ、そのことによって、一人ひとりの自覚的な態度となる。

その際、他の人間に対する一人の人間の態度をめぐってその基準として自覚されることがある。すなわち、他の人間が「赤の他人」なのかどうかということである。この「赤の他人」であるのかどうかは、他の人間が当の人間の「家族」であるのかどうかによって区別される。すなわち、家族の構成員である限り、他の人間は「赤の他人」ではないことになる。しかし、「家族」であれば、他の人間は或る人間にとってすべて＜貢献＞の対

象であるのかと言え、そうではない。そこには、人間同士の交流が前提されよう。ただし、自覚的な態度のうちには、たとえ親密な交流が破綻したとしても、いわば「にんげん」としての態度にまで磨かれて生きるという態度もある。それは、もともとの「にんげん」としての交流の基盤となっている何らかの反省以前のものに基づいてもいる。

藤沢の作品世界の登場人物としては、時代小説においては当然のことながら、身分の違いによって主として町人と武士との二つが挙げられる。両者の間には違いがあるであろう。しかし、その違いにもかかわらず、なお両者に共通のものがあるかもしれない。このことを検討するために、以下これら二つをそれぞれ見ることにしよう。ただし、両者が交流するような形で士分に属さない者と武士との相互の関わりもある。

6. 1 町人

町人の場合は、相互の関係では少なくとも身分の違いは表面からは退いている。そのことによって、それだけ現代にも通じる人間一般が描かれるように思われる。したがって、藤沢の作品世界における登場人物である町人は、作者による人間理解の基本を端的に示すであろう。それ故、これを先に取り上げよう。その描写は、町人の生活を描く市井小説に見られるであろう。

子どもへの態度

例えば、子どもへの「惻隱の心」（孟子、前述参照）を表現するような態度が描かれる。例えば短篇「馬五郎焼身」（藤沢 1986: 53-95）の場合である。

嫌われ者になってしまった木場人足馬五郎が他人のために働いた満足感をその死に顔に漂わせていたことを、藤沢の筆はしみじみと描く。通りか

かった火事で子どもの泣き声を聞き、馬五郎が炎の中に飛び込んでいき、子どもは助けたが、自分は焼死してしまうという描写である。

彼は、ひとり娘を失った悲しさから逃れることができなかつた。女房の過失で娘は死んだ。それから彼は、暴れ者になり、女房とも別れる。自分が貯めた金を盗られたとしてその後つながりのできた女の情夫との間の争いになり、重傷を負い、かつての女房に介抱されながら、いまでも自分のことが好きだという女房を最後まで救うことができない。そのような彼も、救いを乞う女房を哀れむところにまでいきはするのだが。ひとり娘を失った悲しさからも、女房を救うこともできない。そのような彼が解放されるのは、他人の子どものために自己を犠牲にする態度を取ることによってである。そのとき、彼が心から満たされたように見えると藤沢は描く。

馬五郎は冷たい土に、顔を横向きにして腹這うまま死んでいた。顔も背も焼けただれていたが、火に照らされたその骸には、どことなくひどい仕事を終って、身を投げ出して眠っているような安らぎがあった。(藤沢 1986: 94-95)

ひとり娘の死への悲しみは、馬五郎にとって何よりも大きなことである。それだけ彼はひとり娘を愛していたのであろう。しかし、彼女の過失でひとり娘を失ってしまったという女房の悲しみを受け止めることができない。つまり彼は、悲しみの感情のうちにのみ入り込み、その悲しみを女房と分かち合うことができず、そして女房を救うこともできない。そのような人間なのだから、家族の中の父親としても夫としてもその役割を果たしたとは言えない。その結果が暴れ者としての立ち居振る舞いでは、周囲の人間にとっては嫌われ者となっても仕方がないと言わざるを得ない。

もしこれだけで小説が終わるとすれば、それでは物語としては馬五郎にはそのような立ち居振る

舞いからの出口がなさそうにも思われる。そこに出口があるとすれば、馬五郎自身の内面に何かその可能性を見出す他はない。物語においてその心の動きが描かれているわけではない。しかし、馬五郎はそのようなかつての立ち居振る舞いの結果、嫌われ者になってしまった自分を持って余っていたのかもしれない。その自分にけじめをつけることができるのは、他人の子どもを救うために自分を捧げるといふこと、結果から言えば自分の存在を文字通り燃やし尽くすことであつたに違いない。それは、彼にとってはひとり娘の死に対して女房と悲しみを分かち合うことで父親としての役割を果たせなかつたことを別の仕方でも果たすことになるであろう。

この別の仕方は、家族という範囲を越えて他人のために働くということによって、社会的な広がりを持っている。しかも、それはそのために自己の生命をかけることで、他人の子どもの生命によって代表される人間の生命一般に連なっていることになろう。こうして彼は、ひとりの子どもの生命を救うことによって、人間というものとしての生命の尊厳を身をもって示したのである。そのように藤沢の描写は、自己の死によってはじめて<人間>としての尊厳を取り戻した馬五郎の心に寄り添うのである。

家族の中での相互への態度

人間同士がどのように相互に関わりあうのかについて典型的に描かれるのは、彼らが「赤の他人」ではない場合、つまり家族の場合である。家族については、藤沢の多くの小説の題材となっている。その例として短篇「虹の空」(藤沢 1987a: 150-178)をやや詳しく取り上げよう。

祝言を控えた大工政吉と一膳めしやで働くおかよとのカップルの話である。ふたりの話題は、祝言後に住まう予定の家を探すことである。その家

をふたりで見てきた表店に決めようと言うのは、おかよの方である。政吉は、さしあたり裏店でよいとする。おかよが表店にしたいと言い張るのには、彼女がそれまで成長してきた彼女なりの事情がある。その事情とは、彼女が裏店で育ったということである。彼女は、親も兄妹もないひとりぼっち同士のふたりが表店でふたりきりの所帯を持つことに夢を描いているのである。しかし、政吉にとってはただちにおかよの言うとおりにすることには少々ためらいがある。というのは、彼には彼が「赤の他人」と言う「ママ母」がいるからである。

おかよは、「ママ母」が果たして「赤の他人」だろうかと思ひ、一緒に住むのはいやだと言う。その理由は、あまり描かれていない。彼女は、ただその人がいることを自分が知らなかったからだと言う。そこには、その人おすがが母親であれば一緒に住むのが当然という前提がある。しかし、自分が思い描いてきた所帯にはひとりぼっち同士という二人だけしか入っていない。「あんたと二人っきりで、あの家に住めたらしあわせ」（藤沢 1987a: 154）というわけである。

そのおすがに政吉は会いに行く。おすがに祝言のことを話すが、裏店の狭いところに住むと嘘をつく。そのとき、政吉はおすががふたりの所帯によりかかってくる気配を見せないことに安心する。政吉は、むしろ木綿問屋に住み込みで働いているおすがを「息子」が引き取るふうもないのを憂に思うだろうと気にしたりする。しかし、そのように思われてもかまわないとも思う。そのときおすがが政吉のことをその主人夫婦に「赤の他人」だから息子には頼れないと話さるうからと、自分に言い訳をする。このように政吉は、母親との関係を自らの考えに基づいて決めることができないのである。

しかし、自分が思っていた「他人」というその

言葉に対して、そのおすがが自分に辛くあたり「他人」であったはずの記憶の中で、生命の危険から自分を守ってくれたことを思い出す。ママ母のこの態度が「他人」のそれではなかったと思う。この母は、猛犬から子どもであった自分を守ってくれたのである。これも、孟子における「惻隱の心」を思わせる描写である。

その黒く猛^{たけ}だけしい犬は、霧の中から現われたのである。政吉の眼には小牛のように見えた。^{からだ}軀も大きく、声も大きかった。すさまじい咆^ほえ声に、政吉は胸が苦しくなり、おすがの帯をつかんで泣き叫んだ。そのときおすがは政吉の手をふり払って、小さな身体を土塀に押しえつけると、石を拾って犬に立ちむかって行ったのだ。

犬は小さな政吉を^{ねら}狙っているようだった。おすがの手の下をかいくぐって、政吉に^く喰いつこうと跳躍して来た。長い牙と、赤い眼と、すさまじい咆え声が、何度か政吉の眼の前に迫ったか、そのたびに政吉の前におすがが立ちはだかった。犬と組み合って、おすがは何度も地面にころんだようでもある。

ついにおすがは、政吉を深く^{ふとこ}懐に抱きこむと、塀の下にうしろ向きにうずくまってしまった。母親の顔から血が^{したた}滴っているのを見て、政吉はいつそうおびえ、声をかぎりに泣き叫んだ。[中略]

——他人じゃない。[中略]

政吉ははっきりとそう思った。赤の他人はあんなふうには必死に、おれをかばったりしない。（藤沢 1987a: 166-167）

おすがを引き取るかどうかでおかよと行き違いが生じたが、おかよは母親のいる政吉をうらやんでか、乳離れをしていない人間と政吉を見ているようである。

行ってらっしゃいよ。行って、たんとお乳を飲んで来なさいな（藤沢 1987a: 169）

ふたたび政吉はおすがに会いに行く。肩をもむ

という息子を笑う。しかし、その笑いはすすり泣きになり、肩のふるえが政吉の手に伝わって来る。藤沢の筆は、政吉の心のひだを描く。

政吉は無言でゆっくり肩をもんでやった。母親の長い孤独が、静かに胸に伝わって来るのを感じていた。(藤沢 1987a: 171)

そこで政吉は所帯を持ったら、一緒に暮らさないかと言う。しかし、おすがは息子のおかよとの仲を心配し、自分を親だと思ってくれるだけでいいとやさしい笑顔になる。

あたしのことで無理を言ったりするのは、やめておくれ。こうして不足なく一人で暮らしてるんだから、何も心配いらぬよ(藤沢 1987a: 172)

孤独を生きてきた母親が息子に対して穏やかだが凜とした態度を見せるのである。この態度を見て、政吉はおかよにもおすがを引き取るとは言わないが、おかよの言い分を承服したわけではない。

そのような状態にあるとき、おすがの住み込みの間屋が火事に遭う。急いで現場に向かうと、焼けあとからの道をおすがとおかよが歩いて来る。おかよがおすがを助けに来たのである。政吉がおかよに背負われているおすがを抱きおろして背負う。その情景を藤沢は情感溢れる筆致で描く。

「箆筒の物も、みんな焼けちまってさ」

「いいさ。着物なんざ、すぐ買ってやるよ」

と政吉は言った。そして寄りそって歩いていくおかよの手を、おすがに知られないように軽く握った。

「済まなかったな」

「何言ってるのさ」

おかよは、政吉がうるたえたほど、強く手を握り返して来た。

「あんたのおっかさんは、あたしにもおっかさんじゃないか」(藤沢 1987a: 177)

互いへの思いやりを込めた心の動きを風景に託

して藤沢は描く。

振むくと、黒煙に包まれた町がいつの間にか遠くになって、その上に大きな虹がかかっているのが見えた。東の空に真黒な雲が湧いて、いまにも雨が降って来そうだったが、その空を背に、虹はあざやかに色を濃くして行くようだった。

「ひと雨来そうだけ」

政吉は大きな声で言った。そして背中を母親を、なんて軽いんだ、まるで子どもじゃないかと思っていた。(藤沢 1987a: 177-178)

こうして、自分が子どもであったときに自分を助けてくれた母親を今度は自分が守る側にまわる政吉の＜貢献＞する態度が示されるのである。おすがはもともと自立した人間であり、息子夫婦に頼らなくとも生きていくであろうが、おかよはそのようなおすがの態度によって自分の態度に反省を促されたのであろう。火事という災難に遭ったおすがを夫の政吉に言われる前にそれまでの自分の態度を変えて「おっかさん」として受け容れる。つまりおかよにとって無理なくおすがに＜貢献＞する態度を取ることができるようになるのである。おすがもそのおかよの態度によって息子夫婦の態度を快く受け容れるわけである。

盗人

時代小説の中で反社会的な事柄を自らの業とする代表的な存在と言え、盗人が挙げられる。その盗人もまた、「にんげん」として＜貢献＞することがある。これは、藤沢にとって人間というものの理解のために不可欠の描写である。例えば短篇「驟り雨」(藤沢 1985: 101-122)の場合である。

盗人が本職である研ぎ屋が忍び入るはずの本店を前にして雨の止むのを待ちながら、小さな社の軒下で雨宿りする通りかかった人々の話を聞くことになる。その三組目の小さな娘を連れた病身の母親が今晚食べるお米も隣から借りなければなら

ないような事情から彼女たちを捨てた夫のところでの金策が上手くいかず、疲れて娘に手を引かれて家に帰るのもおぼつかない様子を見て、思わず彼女を助けて負ぶってしまう。

「おいらはしがねえ研ぎ屋だが、よかったら、ちっとぐれえ力になりますぜ、おかみさん」

嘉吉が、そう言うと、それまで背中の上でこわばっていた女の身体が、力を失ったように急にぐったり重くなった。女は何も言わなかったが、その重みに、嘉吉は満足して、軽く女の身体をゆすり上げた。(藤沢 1985: 122)

短篇「贈り物」(藤沢 1985: 7-41)において別の盗人が登場する。この小説で描かれるのは、主人公が持病もちの自分にやさしくしてくれた世話になった長屋の女(逃げた夫の借金のかたに女郎にさせられそうになる)を助けるために足を洗ったはずの盗人仕事をして金を盗み、それを「贈り物」にするが、自分は盗みのときに斬られた傷で孤独のうちに死ぬという物語である。贈られた側の女は自分の内面を見つめる。

岡っ引きは深くは疑わずに去った。安堵^{あんど}からおうめは動けずにいる。その安堵の中に、心を刺して来る痛みがあった。じいさんに言われたとおりになっているだけだと考えたが、あたしはやっぱり、じいさんがくれた金が欲しかったのだと思いあたたまったのである。

—その金さえあれば、亭主の借金も払えて、帰気になれば、田舎にだって帰れると思っていたのさ。

かわいそうに、とおうめはつぶやいた。たかがその程度の女なのに、作十は家ものぞいちゃいけないなどとあたしをかばって、暗いところで一人で死んで行ったのだ。おうめはこみ上げて来る涙を溢^{あふ}れるままにしていた。(藤沢 1985: 41)

そのように「贈り物」を受けた女の「心を刺して来る痛み」と涙は、盗人も「にんげん」であっ

たことを描いていると言えよう。

悪党

『天保悪党伝』の一章「悪党の秋」(藤沢 1993: 245-295)において描かれるように、悪党にもまた、自分の悪事のためにその悪事とは関わりのない者が陥った不幸から少しでも救いたいという<貢献>する態度がある。

或る藩から抜荷の工作で金を巻き上げた森田屋清藏は、表の商売をまかせていた番頭を牢獄で死なせてしまった償いをその女房にしようとする。彼は、その「気持」を河内山宗俊に語る。

番頭にはあきというかわいい女房がおりましたが、いまは行方が知れません。あたしはあきをさがし出して詫びを言い、多少の暮らしの金をわたすまでは死んでも死にきれない気持でいるのです(藤沢 1993: 263)

彼は自分のこの「気持」を貫いたので、あやうく殺されかかるのだが、番頭と女房のためにせめてもの償いをしたことになる。

6. 2 武士

武士同士の関係において相手に対して<貢献>する態度が描かれる。それは、「武士の一分」として捉えられている。この表現は、他の武士との関係において武士としての実を尽くす態度を示すものとして用いられている。それは、とりわけたとえ当人同士が不和の関係にあるとしても、相手が困難な状況にあるときに相手を助けるために必要ならば自己の生命の危険をも冒すというところに示される。それが武士たる者の取るべき態度によって守られるべきものとして描かれるのである。この態度は、現代に通ずるものと言うことはできないとしても、しかし、時代の違いにもかかわらず、歴史を超えるものとして、つまり人間の極限的状況を示すものとして捉えることができよう。

「武士の一分」を立てるという態度

「武士の一分」という表現は、例えば短篇「切腹」（藤沢 1987b: 205-306）においてそのような態度を示すものとして登場する。交わりは絶ったが、旧友丹羽助太夫が上意討ちのうわさで窮地に立ったとき、この友人のために加勢に駆けつける榊甚左衛門の言葉のうちに「武士の一分」が見出される。

「手向かえば、おぬしも同罪だぞ。腹切りものだ」
「さればとって、見殺しにしては武士の一分が立たぬ」〔中略〕

最後まで二人は、不和のことは触れず、またまじわりを旧にもどすという話も出さなかったが、助太夫はその夜ほど、甚左衛門を頼もしく思ったことはなかったのである。〔中略〕

見上げた男だったのだ、と助太夫はいまにして思う。甚左衛門はそのとき山浦郷の代官で、藩政の中枢に加わりはじめた能吏だった。その身分と命を、すでにまじわりを絶っている旧友のために捨てようとしたのである。

不和なるがゆえにいっそう、見捨てては武士の一分が立たぬと、甚左衛門は思い決めたのだろう。その気持は助太夫にもわかったが、誰にも出来ることでないことも明白だった。そ知らぬふりをすれば、それまでである。（藤沢 1987b: 284^(註9)）

このように武士であろうとする者にとって、それを誰からも求められているわけでもないのに、自己の内面において守るべきものとして「武士の一分」が捉えられるところに武士なりの＜貢献＞する態度の一端が示される。

後の世代のために身を挺する態度

武士は身分制度にしばられる。武士としての身分が保証されるのは「家」を相続してこそである。もし「家」を相続することができない場合は生涯「家」に厄介をかけなければならない。武士とし

ての身分の底辺に属する者は逆説的だが身分制度を超えて、「にんげん」としての態度を示す。

例えば短篇「果し合い」（藤沢 1982: 181-215）に描かれる物語は、厄介者である大叔父が生命の危険を冒して自分の甥である当主の娘の恋を助ける話である。武士としては最底辺に生きるその姿は武士がぎりぎりのところでどのように振る舞うのかについて典型的に描いている。それ故これをやや詳しく述べよう。

大叔父庄司佐之助がこの恋を助けることになったのは、彼が厄介者になった過去に起こった不幸に関わりがある。自分の過去の不幸を繰り返さないで済むように、当主の娘美也を助けるのである。自分の過去の不幸とは、婿入りの相手だった娘との駆け落ちをするという約束を果たさず、その結果別の男を婿として受け容れた娘が気鬱の病で死んでしまったことである。

彼は、かつて果たし合いで身体に障害を負い、そのために婿入りを断られた。その当の相手の娘が別の婿を迎えようとする際、娘と駆け落ちを約束したにもかかわらず、娘の穏やかな幸せを思って約束の場所にいかなかった。その後娘が気鬱の病で死んでしまったという悔恨故に、灰色の人生を送ってきた。その彼が美也のために生命の危険を二重に冒すのである。まず美也の恋人の果たし合いに助勢したこと、さらに相手を倒したが、場合によっては切腹しなければならぬことである。

美也は、家族の中で一人ぼっちの大叔父にとってたったひとりの味方である。彼女は酒を飲んで当主である甥に叱られる大叔父のために涙を流したり、日常の世話をしたりして、大叔父への＜貢献＞する態度を一貫して取る。逆に大叔父も、彼女にとってたったひとりの味方である。とりわけ彼女の恋についてそうである。彼女には、恋人松崎信次郎がいる。彼女は、大叔父に自分の恋の理

解を求める。大叔父は縁談がいやだという美也の気持を理解する。

「しかし、いやなものには仕方がないな」

「……………」

「こういうことは無理にすすめるものじゃない」
(藤沢 1982: 189)

大叔父のこの言葉は、彼自身の過去の経験に根ざしている。婿入りの相手牧江は、彼との縁談が彼のけがのせいで破談になった後も彼のことを思っていたようである。彼は、彼女の想いを分かっていたのかどうか。駆け落ちを約束することは、おそらく佐之助にとって以上に大変な葛藤を超えての決意であったはずである。このことの重みを彼はあまりにも取り違えたのではないだろうか。

「あたり前の、穏やかな縁組み」が彼女を「しあわせ」するだろう(藤沢 1982: 214参照、以下同じ)という彼の考えがとにかく彼を彼女の想いに応えさせなかったのである。しかし、この考えは間違っていた。牧江は、婿を迎えてからも鬱々として楽しまず、やがて気鬱の病いにかかり、痩せ衰えて死んだという。その事情を知って、佐之助は「悔恨」に打ちのめされた。それから抜け出したとき、「眼の前に灰色の人生をみたようだった」という。こうして彼の人生は、その「悔恨」に規定された。

長い生涯をふり返ると、牧江の思い出だけが、眼の前の野菊のように、一カ所つつましい色どりで光っている。ほかは灰色だった。

佐之助にとって果たし合いは、「ろくでもない人生にけりをつける」(藤沢 1982: 215)機会になったのである。つまり彼は、そのような仕方でも自分の人生と折り合いをつけたということである。そのことは、単なる折り合いをつけるばかりではなく、身近な人間のために何らかの役に立つことをしたということによって自分の人生に意味を与え

ることでもあろう。こうして<貢献>というものは、一方的に与えるものではなく、そのことによって<貢献>した方にも何かを与えられるのであろう。

ところで、佐之助が関わった二人の女性についての藤沢の描写には微妙な違いがある。一方では、若くして亡くなった床上げと呼ばれる隠し妻であったみちについての描写である。佐之助は、彼女の墓を毎年命日にお参りする。このみちに対して佐之助がどのような想いでいるのかは、描かれていない。描かれているのは、美也が想像したことである。彼による彼女の命日の墓参をみちは「やはり喜んでいるに違いないという気がする」(藤沢 1982: 191)という想像である。この彼女の想像について、つまり大叔父佐之助がみちに対して彼女をそれなりに今なお尊重しているという態度を取ることにについて、美也の眼から描かれているのである。佐之助は二十歳で果たし合いをし、不自由な身となって婿入りを諦めざるを得なかったのだが、それだけではない。みちを床上げしたのはそれからほぼ十年たった後のことである。部屋住みとして一生を送らざるを得ないことの屈辱的な身の上ではみちとの関係は人間相互の関係としては成熟しなかったということであろうか。いずれにしても、みちの生涯は佐之助との十二年間どのようなものであったのだろうか。哀しみの中に生き、死んでいかなければならなかったのだろうか。美也が想像するように、佐之助の墓参を喜ぶ他はなかったということなのであろう。藤沢の筆は、残念ながらこの点には及んでいない。

他方では牧江についての描写である。みちに対して以上の態度を取っていた佐之助は、その想いを牧江の方に向けていたようである。彼は、美也の恋について知り、そのことをきっかけに自分の身の上で起こったことを想い起こしたのかもしれない。つまり、美也によって佐之助は、自分の人

生を振り返るように促されたわけである。

大叔父佐之助は、美也を初めて牧江の墓に連れて行く。そして美也に自分が牧江の婿となるはずであったこと、果たし合いで身体に障害が残り、破談になったことを話す。ただし、牧江の名前についてはおぼつかない口調であるが、牧江の人柄を訊ねる美也に大叔父は「おとなしい女子じゃったな」（藤沢 1982: 194）と答えるのみである。ここで美也の想像が描かれる。

美也は牧江という女性は美人だったに違いないという気がした。美人で気だてのいいひとだったのだ。[中略]そういう女性だったから、大叔父は四十年も昔のことを、胸の底におぼえているのだ、と思った。（藤沢 1982: 195）

佐之助の「悔恨」は牧江との駆け落ちの約束を守らなかったことに加えて、相手のために思っていたことが間違っていたということにある。彼は牧江を二重の意味で尊重しなかったということになるであろう。

美也は、大叔父に言われたこともあり、上士の息子縄手達之助との縁談を両親の期待に反して断る。これに対して縄手に嫌がらせを受けた松崎は果たし合いをすることになる。大叔父佐之助の助勢で信次郎は生き延びる。果たし合いは、ふたりにとってももとの駆け落ちの決意を実行する機会となったわけである。

信次郎ののんびりした態度の描写は、ともすれば殺伐としたものになるような果たし合いの話の中でもユーモアを感じさせ、明るい雰囲気をつくりだしている。美也のためだけではなく、意外にもきっぱりとした信次郎の態度に大叔父もまた意気に感じて助勢しようとしたところもあったかもしれない。大叔父は、美也への手紙を読みはしなかったが、以前に美也に連れられて信次郎を見たことがあり、好感を持ったということであろう。後に続く世代の者のために自分の身を挺する大叔

父の態度は、ただ若者たちのためのものではない。それは、かつての自分の「悔恨」を癒し、彼の人生に「けり」をつけさせるものであった。この態度によって、彼の人生の在り方には「にんげん」という意味が与えられたに違いない。

藩士としての武士における職務遂行の態度

武士一般の中でどこかの藩に属する武士の場合であれば、特別の事情が加わる。彼らが基本的には為政者の側にあるという事情である。というのは、武士は為政者の側にある以上、その武士が下級武士であっても、その立ち居振る舞いは社会的な意味を帯びることになるからである。例えば、藩における職務を通しての＜貢献＞する態度が考えられる。しかし、それだけに止まるものではない。たとえ職務によって触発されることがあるにせよ、藩政にとっての役割とは別にその職務の果たし方によっては或る武士の人間としての仕事か他の人間一般に役に立つということがある。これは、「貢献」の語義・用法におけるその意味に対応するであろう（前述参照）。

例えば、『蟬しぐれ』における牧文四郎の父助左衛門は、職務につながるものではあるが、それを超えて目覚しい働きをする。彼は、嵐の夜に川が氾濫したとき、土手の切開を迫られる緊急事態に対して既定の場所の切開を指示する作業隊指揮者の上役にただ従えば済むところを、あえてその方針に異を唱えて切開の場所を変更するように願ったのである。

「切開の場所を、上流の鴨^{かも}の曲がりに変更して頂きたい。」

「ばかを言え、そんなひまはない」

「いや、ぜひとも」

助左衛門の大声が、風雨を圧してひびきわたった。気迫におされたように相羽が言った。

「理由を言え」

「ここで土手を切れば、ごらんのごとく取り入れ前の稲田がつぶれます。しかし鴨の曲がりなら外は荒地。水が原の外に溢れたとしても土砂をまぬがれて、稲は助かります。」

「ここを切ってつぶれる田圃は、どのくらいだ？」

「ざっと十町歩」

「しかし、間に合わんな」

「いや、間に合います」

ふたたび助左衛門の声があたりを圧した。

「鴨の曲がりまでわずかに三町（約三百三十メートル）。ご決断ください」

「……」

「この場所を切って田をつぶせば、金井村の手伝い人足は引き揚げますぞ」

「よし、もつともだ。よく言った」

相羽の決断ははやかった。

「切開の場所を鴨の曲がりに変更する。いそげ」

相羽の声で、作業隊はまた走り出した。だが不平を言うもの一人もいなかった。文四郎も走った。（藤沢 1991: 57-58）

この働きは、少年に父親への尊敬の念を高めさせるに十分であった。

——おやじはすごいな。

と文四郎は走りながら思っていた。

助左衛門は家の中ではあまり物をしゃべらず、登世[妻]や文四郎に何か言うときは低くやさしい声で話す。その助左衛門が気迫のこもる熱弁をふるって、十町歩の稲田をつぶす柳の曲がりの切開を阻止したことが、文四郎の胸を感動で熱くしていた。

——父を見習いたい。

文四郎はそう思い、助左衛門に対する日ごろの尊敬の気持ちがいっそう高まるのを感じた。（藤沢 1991: 58）

父のこの働きへの息子の感動は、この職務を通じての〈貢献〉の社会的な意味に基づくものであ

ろう。この願い出が受け容れられたことによって、多くの田が救われた。そしてそこを耕作する百姓たちにとってはその苦勞が無に帰することから免れることができた。しかし、文四郎の父のこの働きはただ指示された通りにその職務を果たしたというのではない。それは、技術上の確かな洞察と百姓たちへの配慮とを合わせ持っており、風雨についてのさらなる苦勞にかかわらず作業隊の誰からも不平が出ないようなきわめて説得的なものであった。その職務に献身的に尽くす〈貢献〉する態度は、当の職務の社会的な意味がどこにあるのかを明確にし、かつその意味を発揮させた。

このことは、この父が藩内部の勢力争いの巻き添えで切腹させられることになったとき、百姓たちが結果として成功はしなかったものの「助命嘆願書」を提出したこと、また息子が不遇な地位に落とされた後にも、彼らが感謝の思いを持ち続けたことに示されている。彼らは、その思いを息子への温かい配慮として表わすのである。

ここに示されたのは、文四郎の父が〈個人〉として彼なりの仕方ですべて「にんげん」として表わした〈貢献〉する態度およびその成果に対して、百姓たちが彼らなりの仕方ですべて「にんげん」として感謝する態度であろう。

主人への誠を尽くす下男の状態

士分に属さない者も武士と関わって〈貢献〉する態度を示すことがある。例えば短篇「報復」（藤沢 1987a: 8-28）に描かれるように、旧主人夫婦の仇を討つ旧下男の状態である。

彼は、藩の公金を不正に流用したことに家老に直接談判し「諫死」したとされる旧主人およびその跡目相続を名目にその家老に穢された旧女主人夫婦の仇を討ったのである。

ただし、そのやり方は武士が刀を振るうのとは異なる「下男のやり方」である。つまり、家老が

自分の命よりも大切にしており、城主の所望で今年の花が終ると掘り起こされ城中に移されて城主に献上される約束の「おぼろ月」と名づけられた梅ノ木を切り倒すというやり方である。

松平は振りかぶった斧を、はっしと梅の木に打ちこんだ。木は身ぶるいして花を振りこぼした。香ばしい木の香が匂い立った。[中略]

屋敷の中から、ひとが駆け出して来る足音がした。松平は振りむいて、足をふみしめると、最後の一撃を木に打ちこんだ。

幹の半ばから切りはなされた梅が、ゆっくりと傾むき、枝を鳴らしながら地面に崩れ落ちた。無数の花がはじけ飛び、梅の香が匂い立った。はじけ飛ぶ花のむこうに、松平は一瞬顔を見合わせて笑っている、邦之助と康乃のまぼろしを見たように思った。

松平は地面に膝をつき、裁きを待つ人間の姿勢になった。数人の足音が、荒あらしく松平に駆け寄って来た。(藤沢 1987a: 26-28)

ここには、主人夫婦への切々とした思いとこの思いを遂げるこの下男ならではの機知にあふれるやり方との間にあるいささか意外な感じを受ける落差が描かれている。この落差には、かえって彼の思いの切実さが示されているであろう。そしてそれは、単なる復讐に見られるであろう怨念の暗さとは異なる態度であって、その「裁きを待つ人間の姿勢」にはむしろ或る種の潔い明るささえも感じさせる凜とした態度である。これも、＜貢献＞する態度の一つの性格であろう。ここにも自己の外側から道徳的に評価されるべきものとしてではなく、自己の内面から発するものとして「にんげん」であることが示されているであろう。そのことと合致する仕方その人間の＜個人＞としての在り方がそこに現われているに違いない。

7. 藤沢周平の作品世界における＜貢献＞する態度の描写はわれわれに何を示唆するか

本稿のまとめとして、＜貢献＞する態度が求められていることの根拠への問いをめぐって藤沢周平の作品世界におけるこの態度（に類する態度）の描写はわれわれに何を示唆するのかについて、あらためてこの問いの根底にある一般的な問いから考えよう。

その問いとは、一人ひとりの人間が＜人間＞として生きるということがその人間のどのような態度において示されるのかという問いである。この問いが現代日本社会に生きるわれわれにとって立てられているとしよう。そのとき、それが問いとして立てられるということには、次のことが前提されなければならないであろう。すなわち、この問いが例外なくあらゆる人間つまり一人ひとりの人間に対して向けられているということである。このことが前提される理由は、本稿のはじめに述べたように、ここで取り上げられている対象があれこれの人間ではなく、＜人間＞というものの一般であるということのうちにある。

この前提において重要なことは、＜人間＞として生きることが一人ひとりの人間にとって求められているということである。その場合、このことが他ならぬ一人ひとりの人間にとって求められているということは、一人ひとりの人間自身が他の人間ではなくまさに当の人間であることと別のことではない。すなわち、その人間がその人間であることにおいてその人間なりの仕方＜人間＞として生きることが当然実現されるべきこととされているのである。逆に言えば、その人間がその人間であることにとって、その人間なりの仕方＜人間＞として生きることが不可欠のこととされるわけである。つまり、一人ひとりの人間が当の人間であることは当然であるとしても、それだけでは

なく、その人間は同時に<人間>として生きるべきであるとされているのである。このことは一般的には困難であると言わざるを得ない。というのは、一人の人間がその人間であるということが同時にその人間が<人間>として生きるということになるのはどのようにして可能なのか、当の人間にとって必ずしも自明なことではないからである。

では、そもそも一人ひとりの人間がその人間であることとは何か。それは、他の人間との関係の中では他の人間のそれとは異なるその人間の<個人>としての在り方によって示されるのであろう。その際、当の人間はその人間なりの仕方<人間>として生きることを証ししなければならない。つまり、当の人間は<人間>として生きるという共通基盤の上においてこそ、<個人>であることを発揮するように求められている。

ところで、人間一般が<人間>として生きるという共通基盤とは、端的には一人ひとりの人間相互の関係において示されるであろう。というのは、これらの人間が相互の関係において示すことのうち<人間>としての生き方が現われるだろうからである。そして当の人間の<個人>としての在り方とは、人間の相互の関係におけるその人間の立ち居振る舞いに見出されるであろう。もちろん人間の立ち居振る舞いは、この関係のうちにおいてばかりではなく、この関係を離れて自然との関係においても行なわれるであろう。しかし、人間の相互の関係において作られてきた<人間>として生きることが人間一般において共通基盤となるであろう。つまり、一人ひとりの人間のその立ち居振る舞いが人間の相互の関係において行なわれるとき、おそらく当の人間の<個人>であることと<人間>であることとの合致が問われるのである。

ここで想定している一人ひとりの人間の相互関係とは、他の人間に対する一人ひとりの人間の態

度によって作られるものである。つまり、一人ひとりの人間は<個人>としての在り方を他の人間との関係の中で発揮するのである。このように、一人ひとりの人間は、その人間の立ち居振る舞いの中でとりわけ他の人間との関係の中での何らかの態度によって<個人>であることを発揮し、そしてそこにその人間なりの仕方<人間>として生きることを示すのであろう。

そこで先の前提の上に立つならば、さらに次のことが仮定されなければならないであろう。すなわち、現代日本社会において生きるわれわれのうちで一人ひとりの人間は誰でも、その人間がその人間らしく生きようとしているということ、そしてそのことと合致させる仕方<人間>として生きようとしているということ、その際、誰でも<人間>として生きることを実現するために何らかの態度を取ろうとしているということである。

この仮定のもとに、どのような態度がこのことを実現するために取るべき態度として求められているのだろうか。この問いは、われわれ一人ひとりの人間の生き方に関わっているであろう。その限りで、この問いに対する答えとしては、このことを問われた人間の数だけ多くのものがあるのかもしれない。しかし、多くのありうる答えの中でもその基本的なものの一つとして、本稿で取り上げた一人の人間が他の人間のために<貢献>するという態度を挙げることができるのではないだろうか。このように、われわれの仮定に一つの内容を持たせよう。

藤沢周平の作品世界における登場人物たちの<貢献>する態度は、われわれの仮定に関して日本の文化的伝統のもとで現代日本社会においても見られる一つの内容であろう。当の態度は、孟子における「人」に対応するような登場人物たちの「にんげん」としての在り方を示すものである。彼らは、その時代小説の対象としての社会の片隅

に生きており、決して恵まれた生活はしていない。そのような彼らが他の人間を「赤の他人」にしたりせず、その他の人間に対して、「にんげん」として振る舞うのである。

彼らには、身分上の違いも当然ある。その限りで、「にんげん」としての態度は様々である。町人は、孟子における「惻隱の心」に類似した心をもって子どものために身をささげる。つまり、彼らは、孟子流に言えば文字通り「人」としての態度を取るのである。大人同士であれば相互に「にんげん」として振る舞う。盗人にも悪人にも、確かにその稼業については言い訳することはできないであろう。しかし、彼らの稼業がそのようなものであるとしても、彼らは誰かのために身を捨てますのである。武士であれば、身を挺して職務に尽くし、また誰かのために剣を揮うことを辞さない。下男であれば、主人のうらみに対して身分の違いを超えて「下男のやり方」で報復もする。

こうして藤沢の作品世界の登場人物たちは、何らかの仕方で「にんげん」としての態度を取るのである。それは、他者のために＜貢献＞することを自らの生き方とし、そして他者に尽くすことによって自らも満たされるという態度である。ここには何か「本能」的なものの働きが感じられないだろうか。少なくとも、そこで行なわれる自らの在り方への反省もそれぞれの人間の外側から規定されるものではなくて、その内面から自らの生き方とするものである。その限りで「本能」に類するものとして捉えることができよう。それは、藤沢なりの仕方で「貢献仲間」という規定を描いていると解釈することも可能であろう。つまり、藤沢の作品世界における人間像のうちに「貢献心」とほぼ同じようなものが見出されると言えよう。このように＜貢献＞する態度(に類する態度)において、一人ひとりの人間にとってその人間の＜個人＞としての在り方が現われるのであろう。その

ように各人は、他の人間ならぬその人間らしい仕方で「にんげん」であることを証するのであろう。

そこに生き活きと描かれた「にんげん」は、時代を超えて「不変のもの」、したがって歴史を超えるものを示している。この人間像は、「いま」を生きるわれわれに人間というものへの希望を抱かせる。ここには＜人間＞として生きることにとって＜貢献＞する態度が持つ意味について現代日本社会においても「いま」なお生きている日本の文化的伝統における根底の部分が示されているであろう。すなわち、われわれはこの文化的伝統に根ざしている時代小説が時代・社会の制約を超えた＜人間＞に関わる人間像一般の形成のために果たす一定の役割を見出すことができよう。

そこでは藤沢の時代小説の登場人物たちは、それぞれその人間なりの仕方で＜にんげん＞であること、つまりわれわれの文脈では＜人間＞であることを実現している。それぞれの人間なりの＜個人＞としての在り方が彼らの＜貢献＞する態度であると言えよう。そのことによって彼らがそれぞれの仕方で他の人間ではないその人間らしく生きることが描写されている。そのようにして藤沢周平の作品世界の人間像は、＜人間＞というものについて、われわれが抱く人間像一般にふくらみを与えているのである。

註

註1 「社会貢献」・「地域貢献」・「国際貢献」という用語およびそれによって表現される活動がともに一般的であることは、膨大なインターネット情報が示している。

註2 選手の役割について新しい考え方も生まれているようである。例えば野球独立リーグでは「地域貢献」は「野球のついで」ではないとして、選手たちは(地方自治体に

かわって) 清掃活動などを行っているという。記事「地域スポーツノート 独立リーグ考 4」朝日新聞2011.10.21付け参照。

- 註3 福島第一原発の事故のため立ち入りが禁じられた警戒区域で空き巣被害が激増しているという。記事「警戒区域 空き巣30倍」朝日新聞2011.10.16付け参照。
- 註4 現代日本社会が「無縁社会」であることとされることをめぐって多数のインターネット情報がある。
- 註5 歴史を超えるものは、それ自身歴史的に形成されたものであるが、これが人間の意識によって普遍的に存在するもの・変化しないものとして捉えられると考えられる。この点について幸津2011参照。このような歴史を超えるものを含めて、あらゆるものを変化するものとして捉える立場として「空」の立場がある。同2007参照。
- 註6 時代小説の舞台としての江戸時代について、そして日常の出来事における人間の立ち居振る舞いが対象となっていることについて、幸津2002: 136-140参照。他の作家たちとの違いについていくつかの註で触れておいた。同185-190参照。
- 註7 筆者はすでに藤沢の作品世界における人間像についていくつかの視点から論究した。幸津2002; 2004; 2006; 2009参照。藤沢周平研究の文献については同上拙著の文献目録参照。藤沢の作品世界の多様性については志村編2007参照。
- 註8 この「人情」についての藤沢の捉え方をめぐって幸津2002: 95-96で述べた。
- 註9 ここでの「武士の一分」については幸津2009: 33-34で触れた。

文献目録

<考察の対象とする文献>

- 藤沢周平1982『時雨のあと』新潮文庫(「果し合
い」181-215)
- 同1985『驟り雨』新潮文庫(「贈り物」7-41;
「うしろ姿」43-78;「驟り雨」101-122)
- 同1986『暁のひかり』文春文庫(「馬五郎焼身」
53-95)
- 同1987a『霜の朝』新潮文庫(「報復」7-28;「虹
の空」150-178)
- 同1987b『龍を見た男』新潮文庫(「切腹」205-
306)
- 同1991『蝉しぐれ』文春文庫
- 同1993『天保悪党伝』角川文庫(「悪党の秋」245-
295)
- 同1996『周平独言 改版』中公文庫(「時代小説
の可能性」178-183)

<関連する文献>

滝久雄2001『貢献する気持ち ホモ・コントリ
ビューエンス』紀伊国屋書店

<古典>

『孟子(上)(下)』小林勝人訳注、岩波文庫1968,
1972

<研究文献>

- 朝日新聞2011.10.16記事「警戒区域 空き巣30
倍」
- 同2011.10.21記事「地域スポーツノート 独立
リーグ考 4」
- 『岩波漢語辞典』岩波書店1987(=漢語辞典)
- 『新選漢和辞典 新版』小学館1974(=漢和辞典)
- 『広辞苑』第五版、岩波書店1998
- 幸津國生2002『時代小説の人間像—藤沢周平とと
もに歩く—』花伝社
- 同2004『『たそがれ清兵衛』の人間像—藤沢周
平・山田洋次の作品世界—』花伝社
- 同2006『『隠し剣 鬼の爪』の人間像—藤沢周

平・山田洋次の作品世界2―』花伝社

同2007『一般人にとっての『般若心経』―変化する世界と空の立場―』花伝社

同2009『『武士の一分』・イチローの人間像―藤沢周平・山田洋次の作品世界3＋「サムライ野球」―』花伝社

同2011『『宮廷女官 チャングムの誓い』の人間像―人間としての女性と歴史―』花伝社

志村有広編2007『藤沢周平事典』勉誠出版

* 本稿は、拙稿「藤沢周平の作品世界における＜貢献＞する態度の描写」（加藤尚武/関根清三編2011『「貢献する気持ち」共同研究』ホモコントリビューエンス研究所 所収）の増補改訂版である。同拙稿執筆の機会を与えてくださった両編者ならびに同研究所に感謝を申し上げる次第である。